

地域情報（県別）

【富山】ロボット手術の第一線から故郷へ、消化器外科医が挑む地域医療の底上げ-尾島敏康・尾島クリニック院長に聞く◆Vol.1

和歌山県立医大病院時代にロボット・腹腔鏡手術を1500件以上執刀

m3.com地域版

富山県射水市。2024年、現院長の父が尾島外科胃腸科医院として開業していた場所を引き継ぎ、尾島クリニックが誕生した。一度は閉院した実家の医院を、父の病をきっかけに自らの手で再開することを決意。院長の尾島敏康氏は、和歌山県立医科大学などで消化器外科の助手、講師を歴任し、消化器疾患におけるロボット手術を牽引する存在として医療の最前線を走り続けてきた。同氏にその経歴とクリニック開院のきっかけなどについて聞いた。（2026年4月23日オンラインインタビュー、計2回連載の1回目）

▼第2回は[こちら](#)（近日公開）



尾島敏康氏

金沢医大を卒業し、和歌山県立医大消化器外科に入局

——先生のご経歴と、消化器外科を志したきっかけについてお聞かせください。

1999年に金沢医科大学を卒業して、和歌山県立医科大学の消化器外科学講座に入局しました。その後はロボット手術を中心とした内視鏡外科手術の研鑽を積み、和歌山県立医科大学の中央内視鏡部次長、消化器外科学講座講師として最先端医療に従事してきました。そして、2024年に地元である富山県にUターンし、当院を開業しました。もともと、この場所は私の父が尾島外科胃腸科医院を開業していた場所です。父が倒れて一度は閉院しましたが、私が同じ場所で尾島クリニックとして開院しました。

消化器外科を志した理由は、日本人が一番苦しんでいる病であるがんの治療を一生の仕事にすることは、社会的な意義があると考えたからです。がん治療と一言で言っても、内科や腫瘍内科などいろいろな科がありますが、父が消化器外科医だったこともあり、その背中を見ていたからかあまり悩むことなく消化器外科へ進みました。

医師になった当初は開腹手術が主流でした。途中から腹腔鏡手術や内視鏡手術が胃がんや大腸がんにも応用されるようになってきました。当時の教授は開腹手術を多く執刀していました。尊敬している教授でしたが、「教授と同じことをしては教授を越えられない」と考えるようになり、私はより低侵襲な術式である、内視鏡手術にのめり込みました。

オペに入る全員が同じモニターを見て手術が行えること、3Dや4Kなど画面が優れており、術野の確認もしやすいこと。また、全ての手術をビデオに撮ってフィードバックできるため、教育面でも非常に優れていることが内視鏡手術の魅力でした。このビデオモニターを使った手術へのこだわりが、後のロボット手術への興味や、そして現在クリニックでも力を入れている精密な内視鏡診療へとつながっていると感じています。

——大学病院時代は、ロボット手術の第一線で活躍されていたそうですね。

和歌山県立医科大学附属病院時代は、消化器疾患全般の診療と、ロボット手術を中心とした内視鏡外科手術などに携わっていました。特に、中央内視鏡部次長として担当した胃・大腸内視鏡検査は2万件以上、食道・胃がんチームチーフとして執刀したロボット・腹腔鏡手術件数は1500件超に上ります。

2013年に韓国で本物のロボット手術を目の当たりにし、「行き着く先はここしかない」と確信しました。当時、日本ではまだ保険適用外の治療法でしたが、試行錯誤を繰り返しながら、食道がんや胃がんのロボット手術をメインに、10年以上にわたりその道を走り続けてきました。性格的にも、新しいもの好きですから、人よりも新しいことをやり、論文を山ほど書いて成果を発表することにやりがいを見出していました。振り返ると、頂点を目指して戦っていた時期でしたね。

「組織の長になれば富山に帰る」と決めていた

——ロボット手術に注力する中、なぜ地域医療への転身を決められたのでしょうか。

2019年に、父が倒れました。もともと父が医師で消化器外科医だったから自分も医師になった、といっても過言ではありません。ただ、勤務医となり手術に夢中になっていた時は、帰ってきて開業するという選択肢はあまり考えていませんでした。最先端のことをやっていて忙しすぎて、悩み事を後回しにしていたのかもしれない。

当時は、私も40代後半でバリバリの時期でしたから、和歌山でのロボット手術や主導していた臨床試験を放り出すわけにはいきませんでした。それで、断腸の思いで父の医院を一旦閉じることにしました。ただ、心の中にはずっと「いつか自分のルーツに戻らなければ」という思いが引っかかっていた。

大学病院という組織の中で、私は「組織を束ねる長になれば、富山に帰る」と自分に課していました。そこから5年間は目一杯仕事をしました。そして、自分の役割に一区切りがついて、「第2の医師人生をどうするか」と考えた時に、やはりルーツでもあり、心の片隅に引っかかっていたこの場所に戻って、開業しようと決めました。決めてからは時間がなくて、半年で開院までこぎつけました。

——医院の再開にあたって、どのような思いがありましたか。

父の医院を継ぐというより、自らの専門性を武器に、第2の医師人生をスタートさせる感覚でした。普通の開業医ではなく、専門だった胃がん・食道がんの知識を生かして、高度で先進的なことをやりたい。うちはベッドのない診療所ですから、胃がんの手術そのものはできませんが、内視鏡の診断や治療は大学病院レベルの医療を提供できるようにしていきたいと考えています。

富山県の外科医療は、やはり都市部と比べると、腹腔鏡やロボットの普及にまだ伸び代があります。クリニックを開業することで、患者さんにより迅速に高度医療機関と同等の医療を提供し、時には近隣の病院へ出向いて自らオペの執刀もする。そんな「高度な専門性を持つ地域のかかりつけ医」という新しい形を目指そうと思っています。

◆尾島 敏康（おじま・としやす）氏

1999年金沢医科大学医学部卒業。和歌山県立医科大学大学院医学研究科修了（医学博士）。同大学消化器外科助手・講師、中央内視鏡部次長などを歴任。2024年、父が営んだ旧尾島外科胃腸科医院の地に「尾島クリニック」を再開院。現在はクリニック院長として地域医療に従事する傍ら、富山県内の基幹病院でロボット・腹腔鏡手術指導を行っている。日本外科学会外科専門医・指導医、日本消化器外科学会専門医・指導医・評議員、日本消化器内視鏡学会専門医・指導医。

記事検索

ニュース・医療維新を検索



地域情報（県別）

【富山】大学病院で磨いた内視鏡技術と利便性で地域に愛されるクリニックに-尾島敏康・尾島クリニック院長に聞く◆Vol.2

内科認定医・糖尿病専門医の妹と消化器外科専門医・消化器内視鏡専門医の弟も非常勤で診療に参加

m3.com地域版

2024年に再始動した「尾島クリニック」（富山県射水市）は、地域に根差した医療を提供するとともに、大学病院レベルの医療の提供を目指し、内視鏡診療や痔核の治療などをはじめとした高度な診療機能を備えている。自身のバックボーンである外科と内視鏡の技術を融合させ、地域医療の概念をアップデートしようとしている尾島敏康院長。同氏に専門的な内視鏡診療や痔核治療のこだわりや、デジタルを活用した集患戦略などを聞いた。（2026年4月23日オンラインインタビュー、計2回連載の2回目）

▼第1回は[こちら](#)



尾島敏康氏

——クリニックの概要と、専門領域である内視鏡検査・治療のこだわりを教えてください。

当院は、消化器内科、内科、外科を標榜しています。医師は私と非常勤の医師1人のほかに、妹で内科認定医、糖尿病専門医の土山奈央美医師が週1回、糖尿病などの生活習慣病や甲状腺疾患を診察しています。また、隔週土曜日は弟で消化器外科専門医、消化器内視鏡専門医の尾島敏彦医師も診察を行い、幅広い診療を行える体制を整えています。

内視鏡は、私が大学時代から最も得意としてきた分野です。当院では、オリンパス社のEVIS X1の最新鋭システムを導入し、ポリープ切除だけでなく、早期がんを削り取るESD（内視鏡的粘膜下層剥離術）も日帰りで行っています。大学病院であれば、初診から検査など何回も病院に通わなければならない、実際の治療までに数週間から数カ月かかることもあります。しかし当院では、患者さんの症状次第では、午前中にその場で下剤を飲んでもらって午後から内視鏡をすることもあります。最短で当日、あるいは1回の来院で治療まで完結させるスピード感を重視しています。

また、富山県内では希少な内痔核四段階注射法（ジオン注射）による、切らない痔の手術にも力を入れています。長年痔で悩んでいた方が、日帰りで劇的に改善する。この専門性は、遠方から来院される患者さんに対する大きな強みになっています。



クリニック内観

大学病院の医療クオリティをクリニックのスピード感で

——内視鏡などの専門的な領域と、地域のかかりつけ医としての役割とは、どう両立させているのでしょうか。

非常に難しいバランスですが、どちらも全力で取り組んでいます。現在、患者層は父の代からの地域住民が6割、ホームページを見て専門治療を求めて来られる方が4割です。もちろん内視鏡などの専門的な治療にも力を入れていますが、風邪を引いた、包丁で手を切った、転んで頭を打ったという地域医療としてのニーズは絶対に断ってはいけな
いと考えています。

そのため、可能な日は医師の2診体制を整えて1人が専門的な検査、もう1人が地域医療を診るなどの工夫も行って
います。また、内視鏡の手技を極限までスピーディーにすることで時間を生み出しています。そうやって時間を生み
出さないと、1日100人以上の診察と、10件の内視鏡検査や痔の手術の両立は難しいです。私の昼ごはんにかかる時間
は5分程度ですよ。地域医療も大切にしつつ、専門的な医療の質も担保し続けることが私の理想です。

若者にも頼りにされるクリニックとしてデジタル化

——集患や利便性の向上において、力を入れて取り組まれていることを教えてください。

今の若い世代は、絶対にホームページを見て予約してから来ます。夜中に「大腸がん検診の検便で陽性が出た」と
悩んだ時に、その場で予約できなければ選ばれるクリニックにはなれません。そのため、当院では24時間インターネ
ット予約、またクレジットカード決済を真っ先に導入しました。

また、地方ならではのニーズとして、駐車場を広く設計しています。地域柄、トラックや重機で検診に来られる方
もいます。外装も、若年層の方が入りづらさを感じないようなクリニックになるよう設計しています。



尾島クリニック外観

——近隣の高度医療機関との連携についてはいかがですか。

がんの診療連携には特に力を入れており、富山大学病院（富山市）や厚生連高岡病院（高岡市）をはじめとした地域の中核病院に自ら赴き、パイプを作りました。当院で診断をつけ、手術が必要な場合は金曜午後の休診日に私が市中病院へ出向いて直接執刀することもあります。診断から執刀、その後の外来管理まで一貫して診る。これは患者さんにとって大きな安心感につながっていると考えています。

——医院を経営していく上での現在の課題を教えてください。

ディスプレイ製品の価格高騰です。内視鏡手術に関わる物品なんて、ほとんどディスプレイ製品が占めています。ポリープ切除に使用するスネア1つ取っても数千円、ESD（内視鏡的粘膜下層剥離術）に使用するナイフは数万円します。診療報酬は下がるのに、いいものを使おうとするとお金がかかる。正直、せこせこ計算していたらやっていられませんから、自分が楽しく働けて、患者さんにいい医療を提供できたらいいやと割り切ってやっています。

——今後の展望について教えてください。

理想は専門性をもっと伸ばしていきたいですが、地域医療を疎かにはできません。「うちは専門領域を大切にしているから風邪は診ない」とは言えません。

であれば、マンパワーを増やすしかありません。必要ならスタッフを増員して、ドクターを完全2人体制にします。若年層の患者さんの中には、土日しか受診できないという方も多いですから、要望があればサンデー内視鏡や、出勤前に検査を行うモーニング内視鏡、退勤後に検査を行うイブニング内視鏡なども考える必要があるかもしれません。どちらにせよ、発展させるにはキャパを増やすことから始めなければいけないと感じています。

——最後に、開業や承継を検討している医師へメッセージをお願いします。

医療を単なる「事業」と考えてはいけないと思います。AIやデジタルが今後も進化すれば、処方箋を出すだけの医院はやがて淘汰されます。AIに聞けば、医療従事者でなくても薬のセレクトが分かる時代ですからね。でも、内視鏡の手技や手術、そして患者の目を見て話すホスピタリティは、人間にしかできません。だからこそ、何か一つ、これだけは負けないという専門性を磨く努力を惜しまないことが大切だと思います。

私自身も、人生は一回しかないんだから、好きなことやって、ダメだったらまた考えたらいいやくらいのつもりでやっています。好きなことをやって、その喜びが患者さんに伝われば、自ずと事業として成り立ちます。それくらいの覚悟と遊び心を持って、現場で泥臭く患者さんと向き合ってほしいですね。

1999年金沢医科大学医学部卒業。和歌山県立医科大学大学院医学研究科修了（医学博士）。同大学消化器外科助手・講師、中央内視鏡部次長などを歴任。2024年、父が営んだ旧尾島外科胃腸科医院の地に「尾島クリニック」を再開院。現在はクリニック院長として地域医療に従事する傍ら、富山県内の基幹病院でロボット・腹腔鏡手術指導を行っている。日本外科学会外科専門医・指導医、日本消化器外科学会専門医・指導医・評議員、日本消化器内視鏡学会専門医・指導医。

【取材・文＝柳川愛理（写真はクリニック提供）】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

